昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和42年7月1日発行　第4巻第7号通巻第35号(毎月1回・1日発行)

月刊漫画 ガロ

No.35
1967
7月号

カムイ伝㉛
赤目プロ作品
白土三平

鬼太郎夜話②
水木しげる

（前回まで）

江戸時代を指して一口に泰平の世というにはそれなりの理由もなくはないが、その根拠は、乱世の歴史観、ことにそれ以前の戦国の世との対照のうえに立ってのものであって、社会をあくまでも徳川氏の世という支配者中心の視点で眺めた結果に過ぎない。けれども、ひとにぎりの氏族や武士特権階級を中心にではなく、広く民衆の側に立って観れば、泰平の世は民衆がそれだけ完璧な抑圧下に置かれた世であって、むしろ劇的な時代であった。

強固な幕藩体制下、社会が一部の武士特権階級の存続のためにのみ有効な時代では、人々は彼ら支配者の恣意的な秩序のしがらみのうちにしか存立をゆるされなかったが、支配者の貪虐な搾取、徹底的な差別のその底からも、この矛盾に抗い、おのれの夢を有ち、自由を求めて生きようとした人々は少くはなかったのである。

日置七万石の領下、夙谷の非人部落に生まれた**カムイ**もその一人である。士、農、工、商、エタ、非人、といった身分差別の最下層に生まれ合わせ、迫害の下で育ったカムイは、強くなり、強くなることによって、おのれを組みしくこの矛盾から飛躍して人間らしい自由と誇りとを獲得しようとしたのであった。彼はそこに剣の道を発見し、やがて忍びの世界に入り、公儀隠密の一員として日置藩の秘密を探る任を負う。だが、飛躍し得たと思った忍びの世界にも掟と制約があり、彼の自由と誇りとを奪う桎梏となる。そしていま、彼はおのれが藩の秘密を握れば暗殺され、探り得なければまた葬り去られるという、生がはじめから矛盾の内部にしか存在し得ないかたちのなかで生きねばならないのだった。彼をあれほど追い求め、熱愛する女忍**サエサ**に対して、カムイが非情を装うことでしか応えられないのも、おそらく彼のこの困難な立場のゆえにちがいなかった。

同じ花巻村の庄屋下人に生まれた**正助**の夢は、自分の田畑を持った本百姓になることであった。そのためにひそかに読み書きを習い、庄屋の不正を突いて本百姓の夢を実現するが、彼はさらに夢を拡げ、新らしい農具の開発、大規模な新田開拓、商品作物の栽培等、画期的な農業改革を実行する一方、その実行力と天分とで百姓の指導的立場に立ち、個々の百姓が豊かになり力を持つことが反権力勢力をおのずから強化するものだとして、反体制運動の中心的役割りをつとめるのだった。これには、彼がたまたま第一の玉手一揆に遭遇したこと、さらにその一揆の指導者であり後に処罪されて非人預けとなった**苔丸**を知ったこと、その苔丸とともに第二の玉手一揆を指導した経験などが固い基盤となっていた。だが、この正助がいまもっとも心を砕いている問題は、商品作物の栽培に成功しながら、棉や藺が飢饉を迎えたとき飢えの足しにもならぬというそのことであった。その実例を彼は棉の一大産地といわれた摂津、河内においてまざまざと見聞したのであった。

草加竜之進、**笹一角**の二人は、その生まれからいえば、体制側の人間であり、カムイや正助らの夢をはばむ壁を逆に外から支えている特権階級に属していた。竜之進は、元日置藩次席家老**草加勘兵衛**の嫡子であり、一角は元藩剣法指南役をつとめた武士であった。だが、藩の財政立て直し及び**城代家老**と目付役**軍太夫**との勢力争いのために一族が御一門払いの犠牲になるに及んで、竜之進は彼を援ける一角とともに個人ながら、いわば壁の内側に回ったのであった。当初は単に目付軍太夫を敵としていたが、その復讐に失敗し、非人部落に潜伏する間に、彼らは皮肉にもおのれらがもっとも賤侮していた非人らの屈辱を超えた逞しく厳しい生き方によって、やがて真の敵が軍太夫のみならず日置領主と藩そのものの腐敗であることを知ったのであった。なおいままた彼らは、人夫として正助らの新田開発工事に立ちあい、非人、百姓にまじって棉の収穫に手をかしていた。彼らは明らかにいまなお変質の途上にあった。

月刊漫画 **ガロ** 七月号 目次

表紙絵・**白土三平**

カムイ伝
第31回
赤目プロ作品
白土三平

登場人物

カムイ（非人）
弥助（カムイの父）
ナナ（カムイの姉）
一太郎（正助の子）
正助（百姓・元下人）
横目（非人頭）
サエサ（横目の娘）
小六（狂人）
ダンズリ（正助の父）
苔丸・スダレ（非人・元玉手村百姓）
五郎（百姓）
百舌兵衛（鷹匠）
領主（日置領）
アケミ（百姓）
庄屋（花巻村）
城代
目付
権
庄屋（竹間沢村）
卜伝（隠密）
蔵屋（商人）
夢屋（商人）
伝次（野鍛治）
ゴン（百姓）
手風（忍び）
赤目（抜忍）
シブタレ（タレコミ屋）

●読者サロン

『カムイ伝』断想

深沢光有（23歳）

大作『カムイ伝』のテーマも、愈々核心に近づき、筋展開も複雑にその枝葉をのばしてゆく感じですが、この辺で二、三所感を述べてみたいと思います。先ず、表題の〝カムイ〟というのは、単に忍者カムイを指すのみでなく、例の山丈の叫びの内に籠るある種の情念を表わす言葉であることは、既にあきらかであると思いますが、このことはそのまま、『影丸伝』と銘うった『忍者武芸帳』との相違であり、本質的な作品構成の面での前進といえましょう。

つまり、これまで白土先生の多くの作品は、たとえそれがオブジェクトとして捉えられていても、あくまで「忍者」が主役であり物語のテーマの、いわば具象体でありました。ところが『カムイ伝』では、忍者を含めた、作品のモチーフに参加するところの一切の登場人物が、ほとんどいずれも見逃すことのできない比重でもって作品を形成しています。その点が、このドラマをかつてないほど大河化し、複雑化している一つの要因なのですが、歴史の流れの中でうごめく人間関係がどのように変貌し、変革の意志がどのように伸びていこうとも、〝カムイ〟という叫びの中に塗り込められた一種超克的なパトスは、永遠にその輝きを失わないであろうというのが作者の主張であり、その意味から、カムイという言葉の内蔵する〝永遠の真実〟に参加しようとする登場人物はすべて、作品にとって主役であると言えるのではないでしょうか。

それは、白土先生が、忍者的発想（?）からもうひとつ脱皮しようとされる姿勢の当然の結果であり、今のところ、テーマ及び物語性の振幅度を高めるのにかなり成功してもいますが、第二の感想は、だんだんに政治臭が鼻についてきたことです。ことに三月号の後記で、はっきり「共産主義」を謳いあげているのには、少々疑問を感じました。わたしは決して共産主義を否定する者ではありませんが、芸術家の主義主張は、作品の中に、作品と一体になって、芸術として謳われていてこそ存立意義があるものだと思うのです。先生の作品は、『影丸伝』にみられるような、常識的な思考性をはみ出した、極限状況における、一種乱脈なプロットの展開と、強引な説伏力が魅力です。

しかし、折角そういう稀有な芸術性を持ちながら、芸術を支えるイデーの方が一方に偏してしまう、言い換えれば政治的なあきらかさを持つということは、作品の生命を縮めるというより、作品にとって惜しいことです。この意味では、わたしは先生か、余りにラジカルになられることに反対します。ホリティカルな論理性は、結局は芸術をアジティション化し、類型化するのではないでしょうか。

「ガロ」五月号雑感

斉藤里喜代

以前から、漫画こそ地球上で〝どうも表現がオーバーで困ります〟最高の表現形式だ、という信念をもってきた私は、「カムイ伝」においてそれをハッキリ確認することができました。「カムイ伝」は、お世辞抜きにすばらしい作品です。何よりも国際性があります。あのヒューマニズム、あの集団行動、集団作業、涙が出そうなくらい美しい。でも、五月号の〝語り〟ちょっと引っかかります。竜之進は元武士ですから、もう少し流暢な文章で語っても良いはずですけれど……、あれの方が効果が上がるように、先に行ってなるのならいっこうにかまいませんが。

佐々木守氏の「日本忍法伝」、大変面白いですけど、乾いた感じがします。

南波健二さんの絵は、ペンタッチが冴えていて好きでしたが、クライマックスになると迫力に乏しく思われます。

滝田ゆうさんはやはりプロですね。作品の水準が一定しています。

つげ義春さんは不思議な人ですね。どろぼうと少年を描いていた頃から作風が変わらず、青年にウけているようです。

ところで、最近の水木しげる氏を他の人はどう思われるでしょうか?